

<研究ノート>

エティッシュ編纂の曲集「現代のヴォカリーズ」について

A Study of Hettich's "Répertoire Moderne de Vocalises-Études"

雲井 雅人

KUMOI Masato

エティッシュは20世紀初頭のバリ音楽院の教授であり、フォーレ院長の大胆な音楽院改革に協力して、声楽科の質向上のためにヴォカリーズを採り入れた。当時活躍中だった数多くの作曲家にヴォカリーズ作品を委嘱し、それらを曲集としてまとめて出版した。そこからラヴェルの《ハバネラ形式の小品》のように、他の楽器のために編曲され後世に残る作品も現れた。管楽器のために転用された作品もあり、現代の管楽器教育に活かす可能性を見出せる。ラヴェルの作品をめぐる、作曲家と出版社との知られざる確執も、この研究を通じて明らかとなった。エティッシュという人物のややすキャンダラスな生き方や、精力的な仕事ぶりをたどることで、当時のバリの生き生きした音楽状況を感じ取ることができる。

キーワード：ヴォカリーズ、エティッシュ、メル・ボニ、ハバネラ形式の小品

1. はじめに

作曲家ジャック・イベール（1890-1962）には、サクソフォーンとピアノのための《アリア》という美しい小品があり、人気の曲となっている。あるとき楽譜の表紙の下部になにやら気になることが記されているのに気づいた。サクソフォーンとピアノ伴奏版のほかに、ヴィオラ版、チェロ版、クラリネット版、フルート版、ファゴット版など、実にさまざまなヴァージョンのあることが、小さな活字で印刷されているのだ。これほど多くの楽器のためのヴァージョンを作ったということは、イベールはこの自作がよほど気に入っていたに違いない。そしてもっとも気になったのは「ヴォカリーズ（エティッシュのコレクション）」という最後の1行だ。

国立音楽大学附属図書館で調べてみたところ、20世紀初め頃に出版された、アメデー・エティッシュ Amédée Hettich (1856-1937) 編纂『ヴォカリーズ・エチュード 現代のレパートリー⁽¹⁾』という曲集が4冊収蔵されていた（本来は高声用2巻、中声用4巻、低声用1巻、計7巻が出版されており、この図書館には中声用が3冊、高声用が1冊収蔵されている）。その目次には、フォーレ、ビュッセル、イベール、デュカス、ラヴェル、カントループ、オーリック、カサド、セヴラック、ユー、ラポー、ピエルネ、グロヴ

レーズ、アーン、ケクラン、オネゲルなどなど、当時フランスで活躍していた作曲家の作品が70曲ほどもあった。見ていくうちに「これは宝庫ではないか！」と感じた。事実、この曲集の中にイベールの《アリア》が《ヴォカリーズ・エチュード no. 123》の題名で存在していたばかりでなく、クラリネットやサクソフォーンで演奏されるデュカスの《アラ・ジターナ》や、多くの楽器によって取り上げられるラヴェルの有名な《ハバネラ形式の小品》も、もともとは『ヴォカリーズ・エチュード』の中の一曲として収録されていたのだ。このように多くの素晴らしい作曲家たちを動かして、興味深い企画を実行したエティッシュという人は、どのような人物だったのだろうか。そしてどんな目的で編纂された曲集なのだろうか。

2. この曲集を編纂したエティッシュについて

エティッシュ自身について書かれた書籍は見つけることができなかったが、彼と非常に深い関係にあった女性作曲家メル・ボニ Mel Bonis の研究書が2冊⁽²⁾出版されている。エティッシュは、メル・ボニの人生に重大な影響を与えたキーパーソンとしてしばしば登場する。それらを拾い集めつつ、2人の関係を時系列に沿ってさぐっていく。なお、メル・ボニは作曲

する際のペンネームであり、本名をメラニー・ボニ（またはボニス）Melanie Bonis という。近年再評価が進みつつある作曲家である。ペンネームを使用した理由は、その当時作曲は女性がするものではないという風潮があり、「メル」という男とも女とも取れるような名前を使っていたと言われている。

1856年2月5日、アメデ・エティッシュは、フランス人の母とイタリア系ドイツ人の父の間にナントで生まれた。そしてボニは、1858年1月21日、パリのプチ・ブルジョワジーの家庭に生まれた。1876年、ボニはセザール・フランクラに才能を見出され、パリ音楽院の和声とコレペティトゥア（伴奏）科に合格。エルネスト・ギローの和声クラスとオーギュスト・バジユの伴奏クラスで学び、フランクのオルガンクラスを聴講した。同級生にはガブリエル・ピエルネ、エルネスト・ショーソン、クロード・ドビュッシー、イシドール・フィリップらがいた（19世紀後半に若い女性が作曲科に入学することは画期的なことであった）。1879年、エティッシュとボニは音楽院で知り合う。ボニの最初の作品はピアノ即興曲と、エティッシュが書いたテキストにつけた歌曲である。1880年、ボニは和声のクラスで一等賞を得た。1881年、エティッシュはボニに結婚を申し込むが、これを彼女の両親が強く拒絶。11月、このことが原因でボニは音楽院を退学することを余儀なくされる。ちょうどこの頃彼女はローマ大賞の候補者に選ばれていた。

その間エティッシュは、パリ音楽院で、声楽をニコラ・マセ Nicolas Masset (1811-1903) に師事し、アドルフ・ダンノーゼル Adolphe Danhauser (1835-1896) のソルフェージュのクラスを受講していた。23歳だった彼は、学生として音楽を学ぶかわら、音楽出版社 Escudier の新聞 *L'Arte musical* で働いた。そこで「音楽談義：シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン」というコラムを担当してほぼ毎週記事を書き、コンサート批評を行い、多くの音楽家たちと交流していた。

マセ教授は彼の優れた能力を認めており、「彼はとても良くなった。近ごろは体調がかなり不良で思うようにやりたいことができていないが、この若者は知的で自由な詩人であり卓越した歌手になるに違いない⁽³⁾」と述べている。エティッシュは *L'Arte musical* の仕事が常に多忙だったため十分な勉強ができなかったのだ。彼はその仕事に生き生きと熱意を持って取り組んでいたが、夜も眠らず仕事をし、声楽家としてはひどい生活を送っていた。エティッシュは音楽院で勉強を

続けていたが、新聞の仕事は彼からますます時間を奪った。

1882年、エティッシュは音楽院を正式に卒業しないまま、イタリアに教師の職を得てパリを去り新たな生活を始め、ポーランド人のハーピスト、フランソワーズ・ブラヴォスキ Françoise Brabovski と結婚した。子供は誕生したがすぐに亡くなった。

1883年、ボニは22歳年上の裕福な実業家アルベール・ドマンジュ Albert Domange (1836-1918) と結婚する。彼は3度目の結婚で5人の子持ちだった。1884年、ボニはドマンジュとの間に第1子を出産。

1886年、エティッシュがパリに戻り、再び出版社で *L'Arte musical* の仕事を始める。エティッシュとボニはコンサート会場で偶然再会。エティッシュは彼女に作曲を依頼し、曲ができるたび出版社の事務所で試演した。エティッシュは、(歌手としての名前と区別するため) Landely, Amédée L.、Heler の3つのペンネームを使い分けながら、ジャーナリストとしてパリの音楽界で積極的に活動した。コンサート評を書くかわら、コンセルヴァトワールの音楽教育に関する論説も執筆した。指揮者のエドゥアール・コロヌヌや、作曲家テオドール・デュボワ、バンジャマン・ゴダール、ジュール・マスネらとも盛んに手紙を交換した。その当時 *L'Arte musical* は、出版社のアルフォンス・ルデュックの傘下にあった。

1887年、ボニの夫ドマンジュは、その皮革製品の事業に対しレジオンドヌール勲章を授かる。1888年、ボニ第2子出産。

1891年、エティッシュは、*L'Arte musical* のスポークスマンとして、アルフォンス・ルデュック社の支持を受けながら、自分が選んだパリの音楽界の出来事の取材をした。たとえば、彼は音楽院での声楽の教育について当局に助言を与え、学生を経済的な問題から解放して音楽に集中できる奨学金システムを推奨した。また声楽の授業におけるソルフェージュ教育のあり方について警鐘を鳴らしたりした。

同年、ボニは *Piano Soleil* という雑誌が主催した作曲コンクールで最優秀賞を受賞。公に知られるきっかけとなった。審査員にはシャルル＝マリー・ヴィドール、アンドレ・メサジェ、ポール・ド・シューダンスらがいた。

1892年、この頃から2人は親密に仕事をするようになる。エティッシュは私立学校 Cours Tribou で作曲とソルフェージュを教える。そこで生徒たちのために伴奏をしてくれるようボニに頼む。また、*AIRS*

CLASSIQUES⁽⁴⁾ いう17巻にのぼる古典歌曲集を2人が協力して編纂し始めた。これはイタリア語、英語、ドイツ語などの歌詞を持つ古典歌曲を、エティッシュが原語からフランス語に翻訳して歌えるようにしたものである。様々なイタリア歌曲、ヘンデル、モーツァルト、ウェーバーなど古典歌曲が広く網羅されている。

エティッシュはボニに出版社を紹介し、作曲家として世に出ることを後押しした。1893年、ボニは第3子エドゥアールを出産。

1899年、ボニはエティッシュとの子を妊娠。療養するという口実でお手伝いを連れてスイスに旅立った。11月に2人のあいだの子であるマデレーヌが誕生、ヴェルジェ Verger 夫妻の養子となる。マデレーヌは1907年まで養親の元で育てられた。娘に対してエティッシュは「名付け親」と偽り、ボニは「亡くなった母親の友人」と偽っていた。すべては極秘だった。

1918年、アルベール・ドマンジュ没。マデレーヌはボニのもとに身を寄せる。1919年、ボニは、本当の親が自分とエティッシュであることを娘に打ち明ける。それは、何も事情を知らない彼女の息子エドゥアールと娘マデレーヌが会って結婚したいと言いだしたので、それを阻止するためだった。エドゥアールとマデレーヌは、その後別々の伴侶と結婚し家庭を持った。

1906年から1927年まで、エティッシュはパリ音楽院声楽科教授職にあった。1937年3月18日、ボニ没。1937年4月5日、エティッシュ没。

3. この曲集の成立について

著述家であり、全米フルート協会理事およびニューヨーク・フルート・クラブの会長を務めたナンシー・トフ Nancy Toff が、この曲集の成立について詳しく述べている。

この作品の成立に関して、想像以上に興味深いストーリーがある。フォーレが1905年にパリ音楽院の院長になったとき、彼は器楽奏者のための試験曲のレパートリーの大改革を行った。技巧だけではなく感情表現をも促進するために、最新のフランス和声と創作を反映した作品を委嘱した。彼はまた、オペラにばかり偏っていて多くの根本的なことがらが不足していた声楽科の、教育課程の刷新を最優先事項とした。彼はクラスの名称を「歌のクラス」から「発声と歌のクラス」へと変更させた。新たな制度の中で、声楽の学生たちは最初の1年をまるまるソルフェージュのため

だけに費やすことを要求された、しかし教材がわずかしかなかった。そこでフォーレはエティッシュに、同時代の作曲家たちによるヴォカリーズの曲集を出版することを求めた。1906年、フォーレの意を受けたエティッシュは、自分の生徒たちのためにヴォカリーズ作品（言葉のない短い曲）を書いてくれるよう、フランスの一流作曲家たちにアプローチを始めた。彼の最初の依頼先は、当然のことフォーレその人だった。そして院長の貢献は第1集の第1曲となったのだった。このあとエティッシュは1937年までに、14巻150曲以上のヴォカリーズを出版することになる。最初の5巻はフランス人だけであったが、彼の視野は最終的には同時代の作曲家の紳士録-デュカス、アーン、ダンディ、ピエルネ、ラヴェル、イベール、メシアン、オネゲル、ニールセン、ラポー、タイユフェール、ルーセル、ヴィラ=ロボスにまで拡張されることになった。そこにはアメリカ人（コーブランド、ヘンリー・ハドラー、ブレア・フェアチャイルド、フレデリック・ジャコビ）、イタリア人（カステルヌーヴォ=テデスコ）、東ヨーロッパ人（シマノフスキ、タンスマン、チュレブニン、サミンスキー）までいた。そのリストは増え続けた⁽⁵⁾。

以上の内容は、以下のフォーレのパリ音楽院改革と一致する。

1905年6月15日、フォーレが、3月に辞意を表明していたデュボワの後任として、10月の新年度からパリ音楽院の院長に就任することが発表されたとき、音楽界には相当な衝撃が走った。フォーレは1896年以降この学校の作曲科の教授ではあったが、自身はニデルマイエール校の出身者であり、作曲のローマ大賞もとっておらず、歌劇の分野で成功していたわけでもなく、学士院芸術アカデミー会員でもなかったからである。この異例の人事は、「ラヴェル事件⁽⁶⁾」をきっかけに激しさを増したパリ音楽院批判と無関係ではなかった。

フォーレは院長に就任すると、早速第1次改革案を打ち出した。その教育改革は以下の4点に集約される。

1. 書法のための機関として、対位法科とフーガ科を新設し、それぞれに教授のポストを設け、従来の作曲科とは切り離すものとする。
2. 声楽科では、初年度は練習曲と発声練習に重点を置くとともに、2年目以降に課されていたこれまでの義務-オペラ座とオペラ=コミック座のレパートリー

の中から曲を選択しなければならなかった義務を廃止する。

3. 音楽史の授業を、作曲と和声法を履修する学生全員の必修とする。

4. 合唱、管弦楽、室内楽などの集団での音楽の実践に重点を置く。

[……]

こうした改革を断行したフォーレは（フランス革命時に恐怖政治を行なった）「ロベスピエール」と呼ばれ、辞任する教授も相次いだ。彼は動じなかった。そして、これらの改革を契機として、停滞していたパリ音楽院の教育に活力が戻ってきたのである⁽⁷⁾。

それでは、アメデ・エティッシュ編纂の曲集『現代のヴォカリーズ』の内容について紹介していこう。「序文」は、現代におけるヴォカリーズの重要性を高邁な調子で説いている。フランス語のほか、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語で記されており、フランス以外の国々に対してもヴォカリーズの重要性を伝えたいという気概が見て取れる。また歌詞のないヴォカリーズという特性から、他のヨーロッパの国々での需要があると判断したとも考え得る。

「助言」は曲集には記載がなく、ピースとしてばら売りされている楽譜に載っているものである。それも全てのピースではなく、私が発見したのは、No. 10のVuillermozとNo. 18のD'Indyの楽譜においてだけであった。ここで彼は、正しい発声法について主張している。

序文

音楽的な発想の豊かな母体であるにもかかわらず、ヴォカリーズは今日ほとんど省みられなくなりつつあります。だからといって、声楽指導からヴォカリーズをなくしてしまってもよいのでしょうか？もちろん否です！人口に膾炙した古典的な作品を歌うにも、現代の新しい潮流の中にある作品を奏でるにも、なくてはならない存在なのです。

もともとは遊戯に近いようなものでしかなかったことは否めませんが、現代のヴォカリーズはより高い価値を目指していかねばなりません。不自然なほど飾り立てられた外面的な表現の時は過ぎ、想像を絶する忍耐強い努力をもって、上辺だけでなくより内容のある表現を、声楽の確かな武器としていくべきなのです。昔は何よりも「軽やかさ」が特徴だったヴォカリーズですが、以上のことから今日においては「しなやかさ」

が求められます。

かつて声楽家たちの世界に限られていたヴォカリーズを、現代において高い音楽的役割を果たさせるのは、現代の作曲家たち自身をおいてほかにないと私は思い至りました。

私のヴォカリーズ作曲依頼を快諾してくださったフランス国内外の優れた音楽家諸氏に、心からの謝意を表します。クラシック音楽において確固たる地位を占める声楽の指導を私が続けられるのも、諸氏のご協力のおかげなのです⁽⁸⁾。

助言

これらのヴォカリーズは、全体が母音のAに乗せて歌われます。しかし、声楽の実践者、教育者、教育を受けた人であれば、誰もがAという声は、田園の緑や空の青に劣らず多様であることを知っています。つまり器官や声域によって、アクサン・シルコンプレクスないしアクサン・グラヴを示すAは、OやEのような色合いを帯びます。素直にこれらの母音に頼ること、またAを併用することは、有用です。強い歯音であるÉはEの変形形で、喉音や鈍い発声を効果的に修正してくれます。

アタック(attaque)は声門でするのか否か？それは教師が決めることです。独学や十分に指導が受けていない生徒については、常にこれを慎むべきです。というのもそうした生徒は、誤った声門閉鎖音－声帯の上部を緊張させ、声の下方諸部分を唐突に接触させる－と、声門だけを緊張させる正しい声門閉鎖音－加えて、ほとんど誉れに与らなかつたその治世は終わろうとしています－を常に混同するからです。しかるに、正しい声門閉鎖音が当を得ていることについても議論できる機会があれば、喉頭と発声器官を取り返しの付かない悪化へと急速に導くような誤謬の危険性の上で、声門がそのように「誤って」用いられることはないでしょう。

声帯諸部分の緊張と近接を徐々に行うために、また喉頭の生理学がそのことを要求するので、母音を破裂子音(M, B, P)の発声の直前に置くことはしばしば有効ですが、常に慎重さを要します。これらの子音は、それぞれピアノ、メゾフォルテ、フォルテという、強度に対応しています。喉音ないし鈍い声音はVを用います。Vは、これらの声音に、歯と唇の貴重な助けを与えてくれます⁽⁹⁾。

作曲家たちに関しては、巻末に作曲家リスト【資料

①】を、収録順に記載した。作曲年代が分からないものもあった。

1907年に62歳のガブリエル・フォーレがヴォカリーズの第1曲を書き、1935年に若きオリヴィエ・メシアンが第151曲を、またウジェーヌ・ボザが第156曲（おそらく最終）を書くまで、足かけ30年に近い大事業であった。これだけ多くの曲の中にメル・ボニの作品があって当然とも思えるが、公私混同を避けたのか、それは存在しない。リストにある作曲家名を見ただけで非常に興味をそそられるのだが、現在入手困難な物が多い。少しずつ収集して音を出してみたい。

ちなみに、1920年のフォーレ退任後にバリ音楽院院長に就任したアンリ・ラポーは、ヴォカリーズ教育についての方針を継承したようで、当時のオペラ界の大スターだったソプラノ歌手ローズ・キャロン Rose Caron の序文を巻頭に持つ、*L'ART DU CHANT. RECUEIL DE VOCALISE MODERNES*⁽¹⁰⁾ を1928年に刊行した。当代の有名作曲家による20曲の新作ヴォカリーズが収められている。ラポーによる4ページにわたる発声練習の音階課題が冒頭に置かれているのが興味深い。やはりここからも、管楽器へ転用された作品が数曲生まれている（イベール、シュミット、ルーセルなど）。

3-1. ラヴェルのハバネラをめぐる確執

《ハバネラ形式の小品》は様々な楽器のために編曲され、非常に人気の高い作品ではあるが、意外なことに当時ラヴェルと出版社アルフォンス・ルデュックとの関係は必ずしも良好でなかったことが、以下の書簡から読み取れる。パーバイアン(1874-1968)は歌曲《トリパトス》を委嘱した歌手である。

モーリス・ラヴェルからマルグリート・パーバイアンへ
ル・ベルヴェデーレ
モンフォール＝ラモリ (S.&O.)
1927年12月8日 [木]

親愛なる友へ

申し訳ございません、いささか害されてしまった健康のことで、パリに行って医者に診てもらわなければなりませんでした。

いくつもお返事なくてははいけません。

1. 土曜の11時について、了解しました。オトゥイユでの昼食のために「返信を」待って頂いた身として、貴

女の素敵なご招待に応じられないことをご批判なさっていただければ幸いです。

2. 《トリパトス》の一音も思い出せないなどということは、あり得ません。その価値があると思えば、たとえば私は喜んでオーケストレーションをしましょう、ただし帰ってからですが。

《ヴォカリーズ》に関しては、貴女がお歌いになることに差し障りはありません、承知しました。ですが、管弦楽化をお断りするのに加えて、貴女がそれをお聴きになるのもお断りする旨、お許しください。これは、私がこの小品を認めていないからではなく、この曲が不運にもとある出版人によって刊行されてしまうからです... 無作法な人 [アルフォンス・ルデュック] - 少なくともこれは言えることです、あるいは無自覚な人 - が何年も何通も手紙をよこして私を悩ませていますが、私は決して返事をしたくありませんでした。私自身、15年以上も [返信がないこと] 理由くらい書けという気送速達便⁽¹¹⁾ への返事を渋っているのです。

こうして拒絶すると彼がまたも驚くでしょうから、この手紙に書いたことを知らせてもいいですよ、多分、何のことか分からないという体を装うことでしようけれど。

ご心配には及びません。彼は私の《ヴォカリーズ》をオーケストレーションするための、なにがしかの策をうまいこと見つけ出すでしょう。

どうか、この長たらしい説明をお許し下さい。私の拒絶を動機づけるためにそうしなければならなかったのです。

お母上に、恭しい気持ちとともに蘇る思い出へのご挨拶をお伝えください。敬具。

モーリス・ラヴェル⁽¹²⁾

サマズイユ (1877-1967) は作曲家・音楽評論家。ラヴェルと親交があった。

モーリス・ラヴェルからギュスターヴ・サマズイユへ
[ホテル・デュ・モンブラン]
メジェーヴ、1919年1月25日 [土]

親愛なる友へ、

貴殿は以前、こうおっしゃったかと思います。私はあの出来事に関して、国民音楽協会にいる自身の同僚や、貴方の同僚の誠実さ、それに貴方の誠実さも、つゆほども疑ってはいない、と。

その証拠に、ドゥメとのじゅうぶんに活発な議論を通して、私は貴殿の委員会に次のことを通知したい旨を、彼に告げました。作曲家[である私]からコンセル・バドルーに宛てられた《アルボラダ》が、出版人の意向のみによって、私に意に反して国民音楽協会で演奏される可能性がある、と。

最初の被疑者がルネ＝バトンだったのは好都合でした。もし、－貴殿はそうお考えになると思いますが－これらすべての件について貴殿の同僚と私の間で少しでも誤解があったなら、いま申し上げたことを私は彼らに伝え、確認するようお願いすることでしょう。私は《ヴォカリーズ》が国民音楽協会で歌われることには、なんら不都合はありません。ただ一つだけ不都合なのは、もし演奏者がソプラノだったら、ということです。というのも、このヴォカリーズはメゾ・コントラルトかコントラルトのために書かれているからです。もしこの作品が出版されるなら、誰であれ、もっとも下卑な人物に決まっています。貴殿はそれがアルフォンス・ルデュックだということを見抜かれました。何年も前、私は校了していますが、以後、何も音沙汰ありません。貴殿は、この曲について新しい情報を私にもたらず最初の人となるでしょう。

貴殿の親しい思い出とともに。

モーリス・ラヴェル⁽¹³⁾

これによれば、前後の事情や人間関係は判然としませんが、ラヴェルは出版社ルデュックに対して不満や不信感を持っていたことがわかる。もともとは小さなヴォカリーズであったこの作品に対して、短期間にさまざまな編成により夥しい数の編曲が行われている【資料②】。ルデュック社がこれによって大きな収益をあげたことは想像に難くない。

3-2. 他の作品のトランスクリプション

ラヴェルの《ハバネラ》以外の作品も、さまざまな楽器のために転用されている例を挙げていく【資料③】。私の知りうる範囲での調査であるので、このほかにも数多くの編曲作品があることが予想される。批評家時代に築き上げたエティッシュとルデュック社の太いパイプが、このような現象をもたらしたとも考えられる。

4. 終わりに

エティッシュのことを調べていくと、驚いたことに私と同じくこの曲集のことを「宝庫」と呼んでいる人

物を発見した。それは声楽家 小泉恵子氏だった。氏はCD『Sans Paroles 小泉恵子ヴォカリーズ・アルバム』の解説の中でこう述べる。

パリ国立音楽院の教授であった Hettich 氏の編集したヴォカリーズ集（国立音楽大学図書館所蔵）は、求めていた美しい作品の宝庫でした。静かに眠っていた譜面を音に変換する作業は、誰もまだ開けたことの無い宝石箱をひとつひとつ開けるような、心躍る瞬間の連続でした。[……] 言葉から解き放たれた作曲家のメッセージをそのまま届けられたら…⁽¹⁴⁾

私もまったく同感である。作曲家にとっては、歌仙のことを考慮する必要のない「ヴォカリーズ」という手段は、とても魅力的で創作の冒険心をそそるのかもしれない。提案者であるフォーレ院長の最初の作品は、落ち着いた内面的な美しさを湛え、教育的な目的にも沿ったものだ。もちろんそのような作品も多数あるが、中には譜面ヅラがとても難しそうで、到底声楽のための作品とは見えない「声の冒険」のようなものもある。もしかしたら、委嘱された作曲家同士の競い合いのような心理も働いていたのではないかとさえ思われる。こうなると、エティッシュが「序文」の中で問題視した「不自然なほど飾り立てられた外面的な表現」に傾いているのではないかとの気持ちも湧く。これらの曲は、むしろ管楽器で奏されることを待っていたかのように感じられた。

実際にいくつかの曲を自分の楽器であるサクソフォーンで音を出してみると、私の飢えた心に染み込むようにメロディーとハーモニーが入ってきた。クラシックのサクソフォーンというジャンルは、主に近代のフランスの作品をレパートリーとしているのだが、歴史の浅さゆえ、そこに至るまでの流れがよく分からないという憾みがある。それを他の楽器のために書かれた曲を転用したりして、自らをなだめているという状況なのだ。しかし、エティッシュの曲集の作品たちは、まるで私のサクソフォーンで演奏されるのを待っていたかのように自然に感じられた。同じ「息」という表現手段を使うこと、また歌詞を持たないヴォカリーズであることから、これらの作品を管楽器で演奏することは、レパートリーの充実という点からからも、また教育的見地からも価値あることと思う。

2019年度の大学院の授業「領域研究」では、この曲集『現代のヴォカリーズ』について研究した。博士課程の管楽器専攻学生たちとともに、30曲あまり

作品の音出しをし、その成果を2019年12月10日に行われた、国立音楽大学附属図書館 ライブラリー・レクチャーコンサート vol. 4で「パリ音楽院声楽科教授・エティッシュ委嘱のヴォカリーズに迫る」と題して発表した。そこでは、フォーレ、アーン、カントループ、デフォッセ、ヨンゲン、ラビンスキー、メシアン、イベールの作品を手分けして演奏した。出演者は栗谷明菜（クラリネット）、日下瑠子（サクソフォーン）、井口みな美（ピアノ）および雲井であった。実際に多くの曲の音出しをしてみた結果（これは完全に私見であるが）、後世に名の残る作曲家ほど、少ない音でも価値ある作品世界を築くことができていると感じた。

当時のパリ音楽院の声楽科学生たちは、いつもクラスで授業を受けている教授や、学内を闊歩する作曲家たちの作った作品を、当たり前のように歌っていたことだろう。発表されたヴォカリーズ作品はたちまち学内に広まり、学生や教師仲間の評判になったことだろう。望むらくは、この21世紀の日本の音楽大学という場所でも、エティッシュの時代のような生き生きとした作曲家と学生や演奏家との交流があらんことを。

謝辞

日本モーリス・ラヴェル友の会会長の石黒万里生氏から、ラヴェルの《ハバネラ形式の小品》に関して数多くの貴重な助言を頂戴した。ここに深く感謝の意を表したい。

国立音楽大学の音楽学講師 上田泰史氏には、ラヴェルの書簡とエティッシュの「助言」を翻訳していただいた。ご協力に深く感謝する。

国立音楽大学附属図書館には、既に絶版になっている4冊のHettich *Répertoire moderne de vocalises-études* ほか数曲のピースが架蔵してあったのみならず、*"Très douée, bonne musicienne". Die französische Komponistin Mel Bonis (1858-1937)* と *Mel Bonis. Femme et compositeur (1858-1937)* の2冊のメル・ボニに関する研究書も架蔵されていたことで、このような調査ができたのである。頼もしいこの図書館の存在に感謝したい。

註

- (1) Hettich, Amédée-Landély. *Répertoire moderne de vocalises-études : pour voix moyennes*. Leduc, 1907-1909.
- (2) Schenck, Dorothea. *"Très douée, bonne musicienne". Die französische Komponistin Mel Bonis (1858-1937)*. Bibliotheks- und Informationssystem der Universität

Oldenburg, 2005.

Christine Géliot. *MEL BONIS. Femme et compositeur, 1858-1937*. L'Harmattan, 1998.

- (3) Ibid. p. 30.
- (4) Hettich, Amédée-Landély. *Airs classiques*. Salabert.
- (5) The New York Flute Club Newsletter, January 2017の「The Faure Piece: The Backstory by Nancy Toff」からの引用。
- (6) フォーレの弟子ですすでに新進作曲家として活躍していたモーリス・ラヴェルが1905年のローマ賞コンクールの予備審査で不合格になったこと。
- (7) 井上さつき、今谷和徳。『フランス音楽史』。春秋社、2010年、276頁、380頁、381頁。
- (8) Hettich, Amédée-Landély. *Répertoire moderne de vocalises-études : pour voix moyennes*. Leduc, 1907-1909.
- (9) Vincent d'Indy. *Vocalise Etude No.18*. Leduc, 1909. 巻頭のCONSEIL(助言)訳: 上田泰史。下線部は原文イタリックで強調された語。
- (10) Rose Caron. *L'ART DU CHANT, Recueil DE Vocalises Modernes*. Lemoine, 1928.
- (11) 当時のパリでは郵便局の支局どうしを結ぶ管を通して圧縮空気で郵便物を運ぶシステムがあった。
- (12) Maurice Ravel. edited by M. Cornejo. *L'intégrale - Correspondance (1895-1937) écrits et entretiens*, Le Passeur, 2018. pp. 1140-1141. 訳: 上田泰史。
- (13) Ibid. p. 615. 訳: 上田泰史。
- (14) 小泉恵子『Sans Paroles 小泉恵子 ヴォカリーズ・アルバム』Victor Entertainment VZCC-1006, 2007年発売, CD。

参考書籍

Schenck, Dorothea. *"Très douée, bonne musicienne": Die französische Komponistin Mel Bonis (1858-1937)*. Bibliotheks- und Informationssystem der Universität Oldenburg, 2005.

Christine Géliot. *MEL BONIS. Femme et compositeur, 1858-1937*. L'Harmattan, 1998.

Maurice Ravel. Edited by M. Cornejo. *L'intégrale - Correspondance (1895-1937) écrits et entretiens*, Le Passeur, 2018.

参考ウェブサイト:

ロチェスター大学 > Eastman School of Music - Sibley

Music Library > Musical Scores >

<https://urresearch.rochester.edu/institutionalPublicationPublicView.action;jsessionid=4BB6BF67265DB3515E73AB0854C92226?institutionalItemVersionId=29378>
(2020年9月13日参照)

ニューヨーク・フルート・クラブ

<https://www.nyfluteclub.org/uploads/newsletters/2016-2017/17-January-NYFC-Newsletter-final.pdf>
(2020年9月13日参照)

ウィキペディア「メラニー・ボニス」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/メラニー・ボニス>
(2020年9月13日参照)

メル・ボニ ホームページ

<https://www.mel-bonis.com>
(2020年9月13日参照)

La Gazette musicale のメル・ボニの項

https://www.musicologie.org/Biographies/b/bonis_mel.html (2020年9月13日参照)

パリ音楽院の教師と歌手

<https://www.artlyriquefr.fr/dicos/Conservatoire%20professeurs.html> (2020年9月13日参照)

アルフォンス・ルデュック社の2015-16年の楽譜カタログ

https://issuu.com/scoresondemand/docs/cat07590_leduc_classical_choral_cat (2020年9月13日参照)

パリの楽譜店 LA FLUTE DE PAN の「ハバネラ形式の小品」販売ページ

<https://www.laflutedepan.com/recherche?Effiltre=1&Effiltre2=0&tri=0&page=0001&boutique=&instrument=&style=&motcle=Piece+en+forme+de+Habanera>
(2020年9月13日参照)

CD:

Harry White. 23 Vocalises-Etudes for saxophone and piano, BIS-9056, 2016.

小泉恵子『Sans Paroles 小泉恵子 ヴォカリーズ・アルバム』Victor Entertainment VZCC-1006, 2007年発売。

資料①

1er RECUEIL POUR VOIX ELEVEES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 11	Bréville, P. De	MANEH (Chant sans paroles de CAICKJI sur le Bosphore)	1909
No. 12	Busser, Henri (1er)		1909
No. 81	Cras, Jean	Valse a onze temps	1929
No. 64	Davico, Vincenzo		1929
No. 30	Séverac, D. De	CANZONE (Dans le style neo- Javanais)	1920
No. 1	Fauré, Gabriel		1907
No. 3	Hue, Georges (1er)		1907
No. 36	Lefebvre, Ch.		1917
No. 39	Pierné, Gabriel		1924
No. 141	Ravel, Maurice	EN FORME DE HABANERA transposition pour Voix élevées de la Vocalise Etude (Collection Hettich No. 20), par Gilbert A. Leduc	1931

2e RECUEIL POUR VOIX ELEVEES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 32	Busser, H. (2e)		
No. 96	Grovez, G.		
No. 103	Harsanyi, T.		
No. 131	Jacobi, F. (2e)		
No. 74	Jirak, K.B.		
No. 87	Jongen, J. (2e)		
No. 128	Palmgren, S.		
No. 135	Pittaluga, G.		
No. 137	Strimer, J. (2e)		
No. 139	Weinberg, J. (1er)		

1er RECUEIL POUR VOIX MOYENNES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 121	Arakichvili, D.		
No. 41	Auric, G.		
No. 52	Dupios, A.		
No. 17	Hess, Ch.		
No. 124	Jacobi, F. (1er)		
No. 125	Jardan, F.		
No. 104	Karicka, J.		
No. 58	Pedreil, C.		
No. 116	Poldini, Ed.		
No. 7	Ropartz, G.		

2e RECUEIL POUR VOIX MOYENNES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 42	Canteloube, Joseph	en forme de BOUREE	1927
No. 22	Coussade, Deorges		1920
No. 43	Defosse, Henri		1928

No. 51	Doret, Gustave		1928
No. 14	Dukas, Paul	ALLA GITANA	1909
No. 2	Hillemacher, P.L.		1907
No. 5	Lefebvre, Charles		1907
No. 37	Mariotte, A.		1924
No. 20	Ravel, Maurice	EN FORME DE HABANERA	1909
No. 28	Samuel-Rousseau, Marcel		1920

3e RECUEIL POUR VOIX MOYENNES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 111	Bacarisse, Salvador		1930
No. 101	Coppala, Piero	En forme de Recitatif et Romance	1930
No. 123	Ibert, Jacques	ARIA	1930
No. 75	Jongen, Joseph	IMPROVISATION	1929
No. 77	Kilpinen, Yrjo		1929
No. 126	Labinsky, Mus. A.	FERVEUR	1931
No. 133	Opiensky, Henryk		1932
No. 98	Pick-Mangiagalli, Riccardo		1930
No. 117	Rozycki, Ludomir		1930
No. 119	Strimer, Josephe (1er)		1930

4e RECUEIL POUR VOIX MOYENNES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 143	Bréville, P. De		1909
No. 62	Bruschettine Mario		1929
No. 144	Fauré, Gabriel		1907
No. 65	Gnecchi, Vittorio		1929
No. 73	Honegger, Arthur		1929
No. 56	Maripiero, G. Francesco		1928
No. 113	Moreno-Gans, Jose		1930
No. 145	Palmgren, Selim	en forme de Mennet	1931
No. 134	Petyrek, Ferix	I, II	1932
No. 70	Vittadine, Franco		1929

RECUEIL POUR VOIX GRAVES

通し番号	作曲家	サブタイトル	作曲年
No. 13	Chapuis, A.		1909
No. 95	Fauchet, P.		
No. 16	Hahn, R.	SOUVENIR DE CONSTANTINOPLÉ	1909
No. 86	Jirak, K.B.		
No. 4	Koechlin, C.		1907
No. 115	Pilati, M.		
No. 136	Pujol, F.		
No. 27	Rabaud, H.		1920
No. 142	Ravel, M.		
No. 9	Vierne, L.		1907

曲集には入っていない作品

これら7巻の曲集には収録していないが、ばら売りのピースとして出版されている作品がリストに80曲以上ある。その中で特に名の知られた作曲家を挙げていく。フランス以外の作曲家にはその国籍を付した。

G. Auric	V. d'Indy	H. Rabaud
E. Bozza	L. Lajtha (ハンガリー)	G. Samazeuilh
G. Caussade	Ch. Lefebvre	A. Roussel
A. Copland (アメリカ)	H. Maréchal	L. Saminsky (ウクライナ-アメリカ)
Cl. Delvincourt	B. Mautinu (チェコ)	K. Szymanowski (ポーランド)
B. Fairchild (アメリカ)	G. Migot	G. Tailleferre
N. Gallon	O. Messiaen	A. Tcherepnine (ロシア-フランス-アメリカ)
Ph. Gaubert	D. Milhaud	N. Tcherepnine (ロシア-フランス)
A. Gretchaninoff (ロシア)	C. Nielsen (デンマーク)	Ch. Taktakishvili (ジョージア)
H. Hadley (アメリカ)	J. Nin (キューバ)	A. Tansmann (ポーランド)
G. Hue	I. Pizzetti (イタリア)	H. Tomasi
J. Huré	F. Poulenc	H. Villa-Lobos (ブラジル)

資料②

2020年9月作成

Pièce en forme de Habanera (Maurice Ravel) Publisher: Alphonse Leduc

No.	Type	Catalogue No.	Copyright Year	Arranger	Arrangement
1	VocaliseEtude	AL13812	1909	ORIGINAL	Medium Voice & Piano
2	P-Habanera	AL16171	1921	Théodore Doney	Flute or Oboe or Violin & Piano
3	P-Habanera	AL16171	1926	UNKNOWN (Théodore Doney?)	Instrument (various) & Piano
4	P-Habanera	AL17056	1926	Daniel Ericourt	Piano
5	P-Habanera	AL17597	1926	Gaston Hamelin	Clarinet & Piano
6	P-Habanera	AL17679	1926	Jules Viard	Saxophone-Soprano & Piano
7	P-Habanera	AL17680	1926	Jules Viard	Saxophone-Alto & Piano
8	P-Habanera	AL17887	1926	P. L. Neuberth (ad. fingering and bowing)	Viola or Viola Alta & Piano
9	P-Habanera	AL16171	1934	Fernand Gillet	Oboe or Cor Anglais & Piano
10	P-Habanera	AL16171	1926	Paul Bazelaire	Cello & Piano
11	P-Habanera	AL16171	1934	Louis Fleury	Flute & Piano
12	P-Habanera	AL16171	1926	Georges Catherine	Violin & Piano
13	P-Habanera		1926	Hubert Mouton	Orchestra
14	P-Habanera		1930	Henri Paradis	Concert Band
15	P-Habanera	AL17886	1931	Gilbert A. Leduc	High Voice & Piano
16	Vocalise Etude	AL18159	1933	Amédée-Louis Hettich	Low Voice & Piano
17	P-Habanera	AL18452	1934	Clarke S. Kessler	Quintet-Wind (Fl, Ob, Cl, Hr & Bsn)
18	P-Habanera	AL19979	1934	Fernand Oubradous	Bassoon & Piano
19	P-Habanera	AL21477	1955	Maurice Dumesnil	Piano (concert ver.)
20	P-Habanera	AL22722	1959	Jose de Azpiazu	Guitar
21	P-Habanera	AL25503	1977	Janet Ketchum & Peter Segal	Flute & Guitar
22	P-Habanera	AL25865	1980	Christian Lardé & Marie-Claire Jamet	Flute & Harp
23	P-Habanera	AL29163	1998	Thierry Caens	Trumpet in C or B & Piano
24	P-Habanera	AL29211	1999	Daniel Bourgue	Horn & Piano
25	P-Habanera	AL29376	2001	Joaquim de Sousa-Antunes	Cello & Guitar
26	P-Habanera	AL29384	2002	Richard Müller-Dombois	4 Flutes

資料③

2020年9月作成

Aria (Ibert)

No.	Type	Catalogue No.	Copyright Year	Arranger	Arrangement
1	Vocalise-Etude	AL17760	1930	ORIGINAL	Medium Voice & Piano
2	Aria	AL19675	1932		Saxophone-Alto (or Basson) & Piano
3	Aria	AL17775	1931	Paul-Louis Neuberth	Viola & Piano
4	Aria	AL17778	1931		Medium Voice, Flute & Piano
5	Aria	AL17775	1931		Clarinet in A & Piano
6	Aria	AL28222	1931		Clarinet in Bb & Piano
7	Aria	AL17777	1931		2 Medium Voice & Piano
8	Aria	AL18037	1931		Flute (or Oboe), Clarinet & Piano
9	Aria	AL18037	1931		Flute & Piano
10	Aria	AL17778	1931	Arthur Hoérée	Flute, Violin & Piano

Alla Gitana (Dukas)

No.	Type	Catalogue No.	Copyright Year	Arranger	Arrangement
1	Vocalise-Etude	AL13816	1909	ORIGINAL	Medium Voice & Piano
2	Alla Gitana	AL16172	1926	Philippe Paquot	Clarinet in Bb & Piano
3	Alla Gitana	AL16172	1926	Fernand Gillet	Oboe & Piano
4	Alla Gitana	AL19995	1926	Marcel Mule	Saxophone-Alto & Piano
5	Alla Gitana	AL18044	1926	Luigi Silva	Cello & Piano
6	Alla Gitana	AL17063	1931	Louis Fleury	Flute & Piano
7	Alla Gitana	AL17200	1927	Edouard Vuillermoz	Horn & Piano

Chant Corse (Tomasi)

No.	Type	Catalogue No.	Copyright Year	Arranger	Arrangement
1	Vocalise-Etude	AL13816		ORIGINAL	Medium Voice & Piano
2	Chant Corse	AL18113	1932		Clarinet in Bb & Piano
3	Chant Corse	AL18113	1932		Oboe & Piano
4	Chant Corse	AL18113	1932	Marcel Mule	Saxophone-Alto & Piano
5	Chant Corse	AL18113	1932	Marcel Mule	Saxophone-Tenor & Piano
6	Chant Corse	AL18113	1932		Violin & Piano

Vocalise (Copland)

No.	Type	Catalogue No.	Copyright Year	Arranger	Arrangement
1	Vocalise-Etude		1928	ORIGINAL	High Voice & Piano
2	Vocalise	Boosey & Hawkes WFB22	1974	Doriot Anthony Dwyer	Flute & Piano
3	Vocalise	Boosey & Hawkes	1974		Oboe & Piano